弘前大学教育学部紀要　第126号：83～93（2021年10月）
Bull. Fac. Educ. Hirosaki Univ. 126：83～93（Oct. 2021）

幼児期における「遊び」と「表現」を観察する

Observe "Play" and "Expression" in Early Childhood

冨　田　　晃*
Akira TOMITA*

要　旨

本研究では幼稚園年長組を対象に「秋の自然遊び」「わらで遊ぼう」「ワラボーで遊ぼう」の三種の「遊び」の実践活動をおこなった。企画側は，領域「表現」の活動の主に造形面における資質や能力を育てる場として設定した環境であったが，活動の観察，記録，記述，分析，考察を通じて，例えば，視覚や触覚をオノマトペで音に表していたり，素材の長さによって叩く音の高さが違うことを発見して，自ら「音遊び」を楽しむ子どもがいたりと，音に関する感性や表現の資質や能力を育む機会にもなっていたことが確認できた。そして，また，子どもたちは，大人が与えた環境をきっかけにはじめる「遊び」を，企画側の意図を良い意味で超えて，健康，人間関係，環境，言葉，表現と，全人格的に自らの資質・能力を高める機会としていたことがわかった。

キーワード：幼児期と遊び，幼小接続，観察と考察，造形と音

Ⅰ.『幼稚園教育要領』（平成29年）における「遊び」と「表現」

「遊び」とは，それをすること自体が目的の活動である。「遊び」の特徴は，自発性，自己完結性，自己報酬性とされ，楽しいという感覚をともないながら自らすすんで満足するまでそれをすることにある。幼児は，心と体を一つにして全身で「遊び」に関わることにより資質や能力を高め成長していく。

平成29年の『幼稚園教育要領』「総則」において，「幼児の自発的な活動としての遊びは，心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であることを考慮して，遊びを通しての指導を中心とし」と記され，「遊びを通しての指導」がうたわれている。また，指導のねらいを「幼稚園教育において育みたい資質・能力」の三つの柱，⑴豊かな体験を通じて，感じたり，気付いたり，分かったり，できるようになったりする「知識及び技能の基礎」，⑵気付いたことや，できるようになったことなどを使い，考えたり，試したり，工夫したり，表現したりする「思考力，判断力，表現力等の基礎」，⑶心情，意欲，態度が育つ中で，よりよい生活を営もうとする「学びに向かう力，人間性等」とし，それらを一体的に育むものとしている。そして，「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として，①健康な心と体，②自立心，③協同性，④道徳性・規範意識の芽生え，⑤社会生活との関わり，⑥思考力の芽生え，⑦自然との関わり・生命尊重，⑧数量・図形，標識や文字などへの関心・感覚，⑨言葉による伝え合い，⑩豊かな感性と表現，の10の姿が示されている。

『幼稚園教育要領』では，幼稚園において育みたい資質・能力を，健康，人間関係，環境，言葉，表現，の五領域に分けている。領域「表現」では，「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して，豊かな感性や表現する力を養い，創造性を豊かにする」とうたわれ，平成29年の改訂において「豊かな感性を養う際に，風の音や雨の音，身近にある草や花の形や色など自然の中にある音，形，色などに気付くようにすること」が新たに示された。また，平成29年の改訂では，以前にもまして，幼児教育と小学校教育との円滑な接続への具体的な取り組みが求められている。

Ⅱ．小学校の授業における「遊び」

小学校における学びは，学習に特化された授業という枠の中で，教師が示す学習の目標にむけておこなわれる。それは，幼稚園においては，自発性と自由が重んじられる「遊び」が，活動の中心であったことと対

＊　弘前大学教育学部美術教育講座

極をなしており，小学校入学時からしばらくのあいだ，新たな学習環境にうまくなじめない「小１プロブレム」といわれる状況が生じている。こうしたなか子どもの自発性を小学校教育に取り込むために選ばれたのが「遊び」というキーワードであった。従来，「勉強」の反対語とみなされ，なにか悪いことのように思われていた「遊び」という言葉をあえて「授業」に取り込むこむことによって，子どもの自発性を引き出そうというのである。こうして小学校図画工作科の「造形遊び」，音楽科の「音遊び」のほか，「運動遊び」「演劇遊び」「言葉遊び」「表現遊び」など，様々な「遊び」が小学校の正課の授業においておこなわれるようになった。図画工作科「造形遊び」は，まず，材料，場所，空間との出会いに始まり，手と全身をはたらかせて，素材に触れながら，つくったり，こわしたり，ならべたり，結んだり，吊るしたり，包んだり,,，することを楽しむ活動である。また，音楽科の「音遊び」は，「友達と関わりながら，声や身の回りの様々な音に親しみ，その場で様々な音を選んだりつなげたりして表現することである。

「造形遊び」は，昭和52年（1977年）の『小学校学習指導要領』「図画工作科」において低学年１，２年生の内容として導入され，平成元年（1989年）で中学年３，４年生への拡大を経て，平成10年（1998年）以来，現在まで小学校全学年に位置付けられている。

「音遊び」は，昭和52年（1977年）の『小学校学習指導要領』「音楽科」で「リズム遊び」「ふし遊び」が登場し，平成10年の改訂で「音遊び」の文言が現れている。現行の平成29年版では低学年において「声や身の回りの音の面白さに気付いて音遊びをすること」，高学年において「音遊びや即興的な表現では，リズムや旋律を模倣したり，身近なものから多様な音を探したりして，音楽づくりのための様々な発想ができるように指導すること」と記されている。

このように小学校の授業にとりいれられた「遊び」では，結果よりも，行為，過程，気づき，経験が重視される。図画工作科の「造形遊び」では，作品づくりを前提とせず，出会いや過程を楽しむことを大切にし，音楽科の「音遊び」では，その場で音を選んだりつなげたりして表現することによって，音楽づくりへの様々な可能性を広げていくものである。

平成29年の『学習指導要領』では「主体的・対話的で深い学び」が唱えられている。「遊び」の本質は，主体性，自発性であり，幼稚園における「自発的な活動としての遊び」は，小・中学校で求められる「主体的・対話的で深い学び」へと発展するものである。

Ⅲ.「遊び」を観察する

大学の教職課程の必修科目である教職実習は，まず，第三者的な立場で教室の後ろに立ち，授業者と学習者のやりとりを記録して，それを分析することによって教育の過程を理解する授業観察にはじまる。また，文化人類学や社会学のフィールドノート，動植物学の観察日記，化学実験における実験ノート，医師がつけるカルテなど，観察することと，記録をつけることが，学問分野を超えて，物事を理解するための基本である。子どもの成長や発達，興味や関心等を捉えるためには，観察記録をとり，それを分析，考察することが大切である。子どもが活動するとき，子どものなかで何がおきているのかを知るためには，事実を観察・記録し，「いつ，どこで，だれが，何を，どのようにしたのか」を記述し，それに「なぜ」という分析と考察を与えていく。こうした，観察，記録，記述，分析，考察のサイクルを積み重ねることが重要なのである。

Ⅳ.「遊び」の実践

筆者は，幼稚園教育のける領域「表現」の「豊かな感性と表現」の造形面における育成を主たるねらいとして三種の「遊び」を2019-20年度におこなった。小学校教育における「遊び」の授業化への対応といった幼小接続の観点から対象を幼稚園年長組とした。三種の活動を，Ａ「秋の自然遊び」，Ｂ「わらで遊ぼう」，Ｃ「ワラボーで遊ぼう」と名付けた。素材は，Ａは公園の木，草，花，Ｂは大量の藁，Ｃは藁からつくったワラボーという遊具，であり，いずれも自然物である植物とした。自然物には，人工物にはない微細な色や形，触り心地やにおいがあり，それと直接触れ合うことは幼児の感性を豊かにする。三種の実践活動は，当日の参与観察のうえに観察メモ，写真やビデオによる記録を残し，その後，行動の記述，分析，考察をおこなった。三種の活動の詳細は，既発表論文（冨田ほか,2020,2021a,2021b）に掲載したので，以下，本稿では活動の概略および分析，考察を紹介するとともに，「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」との関連を確認していく。

Ⅳ－１．実践活動Ａ「秋の自然遊び」
実施日2019年11月７日

実践活動Ａでは，幼児期における自然との触れ合いと「表現の芽生え」のためにおこなった葉や花を身に飾る活動をおこなった。それは植物を材料とした「自然遊び」であり，具体的な方法は，洗濯ネットにハサミで切れ目をいれてつくったベストを子どもたちが着て，それに葉や花を刺して自らを飾るものである。幼児が，葉の色や形の面白さやに気付いたり，匂いを嗅いだりして自然と触れ合いながら，葉や花で自分の身を飾って楽しもうというものである。

シーン①

本活動のねらいは，自然との触れ合いと表現の芽生えであり，技術の獲得ではない。一方，ベストのネットに，葉柄（葉と茎をつなぐ柄の部分）を差し込むのは，幼児にとって難易度の高い作業だったようで，なかなか思うようにいかない子どもたちがいた。本活動の同種の教材として，ビニール袋をベストにしてそれに両面テープを貼りつけて，さらに植物を張り付ける活動が，すでに知られていが，本活動では，ビニールやテープがもつ人工的な素材感を避けるために，洗濯用ネットを用いた。幼児が容易に葉や花をつけられる方法については，今後の改善課題である。本活動では，葉や花をうまく差し込めない子どもたちは思考錯誤をしながら，お友達や教師に手伝ってもらったり，つけ方を教えてもらったりして活動をすすめた。これは教材開発者が意図したことではないが結果的には，工夫したり，人間関係を豊かにしたりする契機になった。
→③協同性，⑤社会生活との関わり，⑥思考力の芽生え

子どもたちは，まず，落葉した葉に興味を寄せるものと想定していた。一方，実際には，黄色く咲いていたタンポポを見つけて喜んでいた子どもたちがいた。遊びで大切なことは，何か目的にむかって直線的に進むことではなく，素材などをきっかけに，子どもが自らの遊びを展開することである。子どもが，想定外のタンポポに興味をもったのは，想定外の要素を多分に有する屋外の公園という環境によるものであり，そのことによって事前の想定を超えた自然の多様性に出会うことができた。
→⑦自然との関わり・生命尊重，⑩豊かな感性と表現

シーン②

自ら飾った葉が目立つようにカメラにポーズをとる子どもには，自分がつくったものを見せたいという思いと，自分を見せたいという思いとが，共存している。自らの身体に植物を飾ることは，自らをどう見せたいか，という身体装飾的な意味があり，貝のビーズや来訪神に通じる原初的な人間の表現意欲に結びついている。
→①健康な心と体，⑩豊かな感性と表現

シーン③

何種類かの樹種の葉を手にとり，その違いを観察するＯ。その様子を見たＳが，葉っぱの特徴を言葉にしたことから，Ｏの葉っぱへの興味はさらに増していった。このように，気づいたことや思ったことを言葉にして友達と共有することよって，学びの共同体が形成され，さらなる気づきや思いに発展していく様子がみられた。
→⑦自然との関わり・生命尊重，⑨言葉による伝え合い

シーン④

拾ってきた葉っぱをキツネの顔に見立てて楽しんだＲ。見立てとは，人間の想像力によって実在しないものをあるように思い描くことである。植物の葉は，樹種によって特徴的な形をしているとともに，同じ樹種，同じ個体の葉であっても，まったく同じ形のものはなく，一枚一枚微妙に異なる。Ｒは，プラタナスの葉のなかでも，特にキツネの顔に見

える形の葉っぱを見つけだしていた。微細な形の違いを感じとる能力は，無限の多様性をもつ自然とのかかわりから得られる感性である。

Ｒの背中に付いていた二枚の大きな葉っぱは，当日観察者として参加した学生と天使ごっこをしながらつけてもらったものである。Ｒを見ていたＳは，「わたしも天使の羽にして」と教師に言い，教師がＳの背中に葉っぱをつけると，Ｓは感謝を伝えた。このように，葉っぱを天使の羽に見立てることにより，子どもの想像力，コミュニケーション力，社会性が駆使された遊びが展開された。

→⑤社会生活との関わり，⑥思考力の芽生え，⑨言葉による伝え合い，⑩豊かな感性と表現

シーン⑤

担当教師は，最初，落ち葉をつけるように子どもたちに伝えたが，Ｔは，タンポポの綿毛をベストに差し込んでいた。Ｔは，タンポポの綿毛に，不思議さや面白さを感じたのだろう。このように，授業者の想定外の活動であっても，子どもが新しい何かを見つけたり，生み出したりすることが，造形遊びの醍醐味である。またベストへの差し込み方を落ちにくくするための工夫が施され，創造性が発揮されていた。

→②自立心，⑥思考力の芽生え，⑦自然との関わり・生命尊重

シーン⑥

本活動をおこなった５歳児とは，幼児画・児童画の発展段階に当てはめると，画面の中にテーマをもった一つの世界を生み出し，自分と人や物との関係を描く「図式期前期」にあたる。Ｋは，プラタナスの葉を，自分と自分の家族に見立て，小さめの葉を弟や妹に，大きめ葉を両親にというように，葉の大きさ手掛かりに使う葉を選び，自分に見立てた葉の周りに家族に見立てた葉を配置していた。このように想像力を働かせながら空間づくりをすることは絵画表現や空間表現の芽生えといえよう。

→⑥思考力の芽生え，⑧数量・図形，標識や文字などへの関心・感覚，⑩豊かな感性と表現

シーン⑦

本活動では，同じ幼児が，教師とお話ししていたかと思うと，一人になっていたり，そのうちにお友達と合流していたりと，人間関係を柔軟に変化させていた。また，普段から仲良しのＡとＮは，互いに共感しあいながら同じ活動をしていた。本活動の主なめあては自然との触れ合いと表現の芽生えであるが，人間関係をふくむ全人格的な成長の機会となった。

→③協同性，⑤社会生活との関わり

シーン⑧

自然物には，色と形があるだけではなく，肌触りがあり，匂いがあり，舌にのせれば味があり，叩いたり擦ったりすれば音がする。そして，それらは時間とともに刻々と変化している。トチノキの葉は，表側は滑らかだが，裏側にはたくさんの毛があり，やわらかな触感がある。Ｕは，その触感を「ふわふわ」と言葉にあらわし，別の子は「もふもふ」という。物事の状態や動きなどを音で象徴的に表した語をオノマトペという。オノマトペは体験を通じて習得される。とくに，「ふわふわ」や「もふもふ」といった触覚と結びついたオノマトペは，触覚だけでなく，視覚とも結びついた実体験として身体に記憶される。一方，現代の子どもが得る体験の多くが，テレビやコンピュータ・ゲームなどの実体験を伴わない仮想的なものに占められつつある。本活動で，子どもたちが，実際に，自然物を見て，触わり，匂いを嗅いだりするなどして五感全体をもって味わった体験は，音を使っ

たオノマトペとともに身体に記憶されたことだろう。
→⑨言葉による伝え合い，⑩豊かな感性と表現

シーン⑨

両手に葉っぱをもち，手を頭の上に持ち上げて「ウサギだよ」というＥ。こうした身体の動きをともなった模倣表現は，ダンスや演劇といったパフォーミング・アートの芽生えである。模倣とは，対象に関わろうとすることであり，人間の学習に必要な最も基本的な能力である。Ｅは，幼稚園で飼育しているウサギに愛着心をもっているのだろう。その後，Ｅの様子を見ていたＵは，Ｅと同じように葉っぱを持った両手を頭の上に持ち上げた後に，「ネコだよ」という。ＵはＥへの模倣を通じてＥとの一体感を得るとともに，アレンジを加えることにより自分という個性を打ち立て，「わたしが，今，ここに生きている」という感覚を確認する表現をおこなったのである。

→①健康な心と体，③協同性，⑤社会生活との関わり，⑥思考力の芽生え，⑦自然との関わり・生命尊重，⑨言葉による伝え合い，⑩豊かな感性と表現

シーン⑩

タンポポの綿毛をみつけてきたり，落ちにくくするための工夫をしたりしていたＴ。授業者の想定を超えて，落ち葉や花を組み合わせてコサージュのようなものを作り創造性を豊かに発揮していた。

→⑥思考力の芽生え，⑩豊かな感性と表現

シーン⑪

活動後，ほかの子どもたちが遊具で遊ぶなか，活動の続きをするＵ。自らの意志で「今」を作り出すことは，個性ある人間性を形成する。公園から幼稚園への帰り道で，道端の落ち葉を，軽くけったりしながら，触感を楽しむＴ。そして，手に残る葉っぱの匂いを確かめるＩとＫ。活動時間を終えても活動の余韻を楽しむことにより，活動内容が子どもたちに定着する。
→①健康な心と体，⑦自然との関わり・生命尊重，⑩豊かな感性と表現

Ⅳ－２．実践活動Ｂ「わらで遊ぼう」
実施日2020年11月９日

水遊び，砂遊び，泥遊び,,，と，子どもは，素材と全身でかかわる遊びが大好きである。子どもは，水をかけ合い，砂を積み上げ，泥を塗りたくりながら，視覚，触覚，嗅覚，聴覚，味覚と五感を働かせながら体全体で材料とかかわる。それは，人間の「生きる力」の根幹にあるところの感覚を研ぎ澄まし，感性を豊かにする活動である。本活動は，こうした材料と全身にかかわる「感覚遊び」に，日本の基層文化にある藁を取り入れたものである

シーン①

藁との出会いの場面である。たくさんの子どもたちが一斉に藁を運び出していた。あっという間に１箇所に集め小高い山を作った。迷いもせずに藁に寝転がって感触を楽しんでいた。子どもたちにとって藁との出会いは興味・感心にあふれるものであった。
→①健康な心と体，⑦自然との関わり・生命尊重

シーン②

いつも食しているお米が稲穂の中から見つかるという発見をしたり，稲穂から米を取ったりという不思議さや面白さを感じたようだ。また，本活動では肌触りの良い藁の部分を集めたことにより，藁の触感が心地よいと感じたようでもある。
→①健康な心と体，⑦自然との関わり・生命尊重，⑩豊かな感性と表現

シーン③

一見いざこざに発展するかもしれないと心配するくらい激しい藁のかけ合いであったが，楽しく遊び続けていた様子から，藁に触れて遊ぶ中で子どもたちは全身で藁を感じ取る体験をしていたことがわかる。

→①健康な心と体，⑤社会生活との関わり，⑦自然との関わり・生命尊重

シーン④

藁を積み上げる行為の繰り返しによって，藁の感触に体全体で気づくことができた子どもたち。素材の感触からベッドに適していると感じ，藁の積み上げ作業を続ける中で感じたことを生かしながらベッドを完成させ体を休めていた姿が印象的であった。

→①健康な心と体，⑦自然との関わり・生命尊重，⑩豊かな感性と表現

シーン⑤

ある子どもは，鳥の巣のイメージを既習経験からもち合わせていたのだろう。藁から鳥の巣をイメージし，自分が鳥になって過ごしていた。藁の素材から子どもが表したいことを思い付き，どのように表すかを考えながら作っていた様子から造形活動を楽しんでいることが伝わってきた。

→⑥思考力の芽生え，⑦自然との関わり・生命尊重，⑩豊かな感性と表現

シーン⑥

これまでの製作遊びの経験から，藁でもブレスレットを作ることができると考え製作活動を始めた子どももいた。これまでブレスレットを作るときは人工の材料を使った物がほとんどであったが，藁という自然物からも発想し造形的な活動に向かおうとしていた。最初できなくてもすぐに諦めずに納得するまで取り組んでいたことから強い製作意欲を感じた。藁は紐的な役割にも使うことができるということに気づき，ばらばらだった藁を丸くなるように巻き付けていたことから，素材の特性に体験から学んでいったことが分かる。

→⑥思考力の芽生え，⑩豊かな感性と表現

シーン⑦

30分以上藁でダイナミックに遊んでいた子どもたちにも疲労の色が見られるようになると，それまで投げ合っていた藁を今度は下に敷いたり体にかけたりして体を休めている様子が見られた。投げ合って遊ぶのも体を休めるのも全て藁だけでできるという素材の素晴らしさを経験で感じ取っているのかもしれない。

→①健康な心と体，⑦自然との関わり・生命尊重

シーン⑧

藁の会の野崎氏に教わりながら，見つけた籾米から手作業で精米していた子どもがいた。なかなか根気のいる作業だが，まさか稲穂から普段食している白米が出てくるとは思っていなかったのだろう。不思議に思ったことを楽しそうに話していた様子から発見の喜びを感じられた。このような体験は，自然に対する畏敬の念を育て，科学的な見方や考え方の芽生えを培う上で基礎となるものである。

→⑥思考力の芽生え，⑦自然との関わり・生命尊重，

シーン⑨

ブレスレットを作り終えた子どもは，新たな藁を集めて，てるてる坊主を作っていた。ブレスレット作りでは，成形するまでに試行錯誤する様子が見られたが，今度は素材を生かして短時間で作り上げていた。藁は紐的な役割にも使うことができるということに気づき，ばらばらだった藁を丸くなるように巻き付けていたことから，素材の特性に体験から学んでいったことが分かる。
→⑥思考力の芽生え，⑩豊かな感性と表現

シーン⑩

ある子どもは，先日の園行事で行われたサツマイモ収穫の際，サツマイモの蔓でリースの土台を教師と一緒に作ったという先行体験があった。その経験を思い出し，藁でもリースを作りたいと考えた。ある程度藁を触って遊んだ後の遊び出しであったことから，藁を十分に触って素材に慣れていたことや，藁で製作遊びをしているのを見ているうちにリースのような形でも作られるのではないかという見通しがもてたことによる活動であったと推測する。また，できあがったリースは丈夫にできあがったことで，帽子としても活用できることに気づくことができたようである。
→⑥思考力の芽生え，⑩豊かな感性と表現

シーン⑪

遊び出しから30分ほど過ぎてから藁でボール作りを始めた。それまでの遊びで藁に触れたり，確かめたりしながら，藁の性質を知っていった。興味をもって繰り返し関わる中で，使いこなすようになっていた。大学生にも手伝ってもらいながら藁でボールを作ることができ，その遊びに興味をもった子どもが加わり，新しいアイデアが付加された。藁がボールになるという発見を生かして更に遊びが広がっていく過程を見ることができた。
→⑤社会生活との関わり，⑥思考力の芽生え，⑩豊かな感性と表現

Ⅳ-3．実践活動Ｃ「ワラボーで遊ぼう」
実施日2020年11月30日

藁を束ねたワラボーという棒状の藁の束をもちいて「造形遊び」をおこなった。子どもたちは，並べる，積む，繋げるといったことをしながら，ワラボーを何かに見立てたり，ごっご遊びをしたりして「造形遊び」を楽しんだ。また，活動の後半には，接合を可能にする補助部材を加えたことになり，「つくりたいものをつくる」造形表現が展開された。また，子どもたちは，ワラボーを遊具にして，飛び跳ねたり，かけっこをしたり，投げたり，打ったりと，全身をつかった運動をしたり，長さによって叩いた音の高さに違いがあることを発見したりと，実に多岐にわたる遊びを展開した。

シーン①

ホールに着くと，まず，藁とは，どういうものであるのか，稲垣藁の会の野崎氏の話をきいた。前回十分に遊んだ藁についてであり，子どもたちは初めて聞く話に興味津々であった。実際に遊んだ素材であったため，子どもたちは十分にイメージしながら話を聞くことができていた。中でも前回遊んだ藁は柔らかい部分を使っていたが，今度遊ぶワラボーは固い部分でできていることを興味深く聞いていた。
→⑤社会生活との関わり，⑥思考力の芽生え，⑦自然との関わり・生命尊重，⑨言葉による伝え合い

シーン②

前回のふわふわとしたシビだけの藁から，今回は棒状のワラボーになり，子どもたちの遊び方が変わった。まず，ワラボーを広い空間に持ち出し，長めのワラボーをバット代わりに，短いワラボーをボール代わりにして，ワラボーの打ち合いが始まった。打ち始める順番は話し合いながら決め，より遠くに飛ばした方が勝ちというルールを作って遊びを楽しんでいた。

→①健康な心と体，③協同性，④道徳性・規範意識の芽生え，⑤社会生活との関わり，⑥思考力の芽生え，⑨言葉による伝え合い

シーン③

別の子どもたちはワラボーを組み合わせてバーベキューコンロを作っていた。コンロができあがると上に乗せたワラボーは肉や野菜に見立て，手にはトングを持つようにして遊びを楽しんでいた。バーベキューごっこという遊びを思い付き，形から発想する感覚を生かしながら自由に遊んでいる様子が見られた。

→①健康な心と体，③協同性，⑤社会生活との関わり，⑥思考力の芽生え，⑩豊かな感性と表現

シーン④

ワラボーを見て，「タワーを作りたい。」と発想し挑戦していた。筒状であるため，ピラミッドのように作りたいが途中で転がってしまう。「うまく積めない。」と言いながらも何度も何度も挑戦している姿から，主体的に取り組む姿が見られた。

→②自立心

シーン⑤

大量のワラボーを用意して始めたが，自分たちが発想する家づくり分のワラボーは足りない。発想した場に対して量的な感覚を掴むのはまだ難しいと感じた。そこで規模を小さくするというよりは，近くの人に譲ってもらうという解決方法を試すも，相手も必要で使っているので，折り合いをつけなければならなかった。自己中心的に相手の場を壊してまで，ワラボーを手に入れようとしていた子どもには教師から「キャンプファイヤーを作っているようだよ。」と促しを受けた。

→⑤社会生活との関わり，⑧数量・図形，標識や文字などへの関心・感覚

シーン⑥

同じ形の物がたくさんあることからドミノ作りを発想した子どもたちがいた。生活経験の中にドミノ遊びがあったのだろうか。藁であるために縦に何個も立たせるのは大変な作業であるが，終始楽しく並べ続けている２人の姿があった。いざ倒してみると本物のドミノのようには倒れなかったが，チャレンジできたことをとても喜んでいた。

→③協同性，⑧数量・図形，標識や文字などへの関心・感覚

シーン⑦

長さによって音の高さが違うということを発見し，楽器に見立て遊んでいた子どもがいた。一人の子が，さまざまな長さのワラボーを，手の平に叩いたりして，音の違いを味わい，楽しんでいると，それに興味を示した別の子も音の違いを体感し，楽しんでいた。「造形遊び」を念頭におこなった本活動であるが，子どもたちの豊かな感性により「音遊

び」へと展開していった。
→⑩豊かな感性と表現

シーン⑧

それまで棒状のワラボーのみを提供し，その中で活動を楽しんでいた子どもたち。ここで新しい素材（各種ワラボー・ジョイント，半分の長さの割り箸，輪にした紐ゴム）を紹介すると，話を聞いた子どもたちは大喜びであった。ワラボー同士が繋げられること，棒状以外の様々な形のワラボーが使えることに興味津々であった。
→①健康な心と体，⑥思考力の芽生え

シーン⑨

早速繋げる活動に入った子どもたち。一人一人がばらばらに活動するのではなく，自然と役割分担が生まれ，協力し合っていたのは素晴らしい。何か作りたい物があるというよりは，新しい素材に出会い，どんどん試している姿が印象的であった。
→①健康な心と体，③協同性，④道徳性・規範意識の芽生え，⑤社会生活との関わり，⑥思考力の芽生え，⑩豊かな感性と表現

シーン⑩

二人は，作りたい物があらかじめあるということではなく，出会った新しいワラボーに興味をもったようだ。ジョイントにもチャレンジしていた。素材を色々試すうちに，最終的には剣を完成させていた。新しい素材に慣れることで次第に完成形へと向かう姿が見られた。
→③協同性，⑧数量・図形，標識や文字などへの関心・感覚，⑩豊かな感性と表現

シーン⑪

とても長いく繋がれたワラボーに興味をもった子どもたち。それまで違う遊びを楽しんでいた子どもも集まり，思い思いに遊び始める。製作物が遊具として使われることになった。とても長いので渡りきるまでに時間がかかり遊び甲斐があったようだ。
→①健康な心と体，③協同性，⑤社会生活との関わり，⑥思考力の芽生え

シーン⑫

連結していくうち，他のお友達のものとも繋げることになった。その柔軟な発想のおかげでたちまち10m程にもなる長いワラボーが出現した。それを見て「世界一長いヘビになった。」という素敵な見立ても出てきた。また，作り終えるとすぐに遊具と化し，一斉に遊び出すところにも柔軟な発想が感じられた。両端から渡り，ぶつかったところでドンジャンケンをする姿も見られるようになった。
→①健康な心と体，③協同性，④道徳性・規範意識の芽生え，⑤社会生活との関わり，⑥思考力の芽生え

シーン⑬

次第に大人数で遊ぶ姿が見られていたが，活動時間が残り少なくなると，また個々に製作する姿が見られるようになった。ある子どもは短いワラボーを斜めに繋げることで王冠に見立て，自分の頭の形に調節しながら作ることができた。
→②自立心，⑥思考力の芽生え，⑩豊かな感性と表現

シーン⑭

ある二人はワラボーの素材を十分試した後，普段の廃材遊びから想起したであろう，ゴム飛ばし遊びへとシフトさせていた。できあがるまで試行錯誤する様子が見られたが，銃が完成すると，すぐさま友達同士で飛ばし合いを楽しんでいた。素材の出会いから作った物で遊ぶという一連の姿を見ることができた。

→③協同性，⑥思考力の芽生え，⑩豊かな感性と表現

シーン⑮

活動時間最後の辺りに見られた遊びはリレーごっこであった。運動会で経験したリレーを思い出し，バトンやスタートライン等，全てワラボーを使って行っていた姿から工夫は柔軟な発想力を感じた。また，ルールを自分たちで決めて遊ぶことができていた。

→①健康な心と体，④道徳性・規範意識の芽生え，⑤社会生活との関わり，⑥思考力の芽生え

Ⅴ．まとめ

幼児は，周囲の環境から不思議さや面白さを見付けて心を動かしている。そんな心の動きを声や体といった自らの身体や，素材を仲立ちに表現する。幼児は，感じたり，考えたり，イメージを広げたりする経験を重ねながら感性と表現する力を養い，創造性を豊かにしていく。本研究の三種の実践活動の観察，記録，記述，分析，考察を通じて，感性や表現を育む幼児の姿を具体的に確認することができた。

本研究の三種の実践活動は，領域「表現」の活動の中でも主に造形面における資質や能力を育てる場としておこなったものである。一方，子どもたちは，視覚や触覚と通じて得た感覚を，オノマトペをつかって音に表したり，素材の長さによって叩く音の高さが違うことを発見して，自ら「音遊び」を楽しむ子どもがいたりと，音に関する感性や表現の資質や能力を育む機会にもなっていたことが確認できた。また，さらに，子どもたちは，大人が与えた環境をきっかけにはじめた「遊び」を，企画側の意図を良い意味で超えて，健康，人間関係，環境，言葉，表現と，全人格的に自らの資質・能力を高める機会としていることがわかった。

『幼稚園教育要領』では「幼児理解に基づいた評価の実施」として「指導の過程を振り返りながら幼児の理解を進め，幼児一人一人のよさや可能性などを把握し，指導の改善に生かすようにすること」としている。「遊び」は，それをする本人にとっては，それをすること自体が目的の活動であるとともに，幼稚園における「遊び」は「めあて」をもった活動であり，「遊びを通しての指導」によって，資質や能力を育む教育手段である。

本研究では，幼稚園年長組を対象に三種の「遊び」の活動実践をし，観察記録を取り，その記述，分析，考察を通じて「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」との関連を確認した。こうした，「遊び」の観察，記録，記述，分析，考察をすることによって，いつどんな時に子どもの表現が芽生えたり，自立心が育まれたり，協同性が養われたりして，子どもが成長していくのか，子どもの理解を深めることができる。幼児を「遊び」に導き，観察，記録，記述，分析，考察する。こうした過程を積み重ねていくことが，幼児への理解を深め，今後の幼児教育をよりよいものにしていくことになろう。

謝辞

本研究の活動実践は，弘前大学教育学部附属幼稚園の2019年は久保琴枝先生，2020年は松山祐子先生が担当するクラスでおこなわれ，活動の実践と記録にあたり大いに協力いただいた。また，藁をテーマにおこなった2020年の二種の活動実践では，青森県つがる市の拠点をおく稲垣藁の会の協力を得た。野崎克行氏からは，子どもが楽しく遊べるようにと固い部分を丁寧に取り除いた大量のワラの提供をうけるとともに「藁の専門家」として講師になっていただいた。長瀬公秀氏には，自ら考案したワラでできた遊具ワラボーの提供を受けた。ここに記して感謝する。

文献

安久津太一ほか「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿に働きかける：幼児の自由遊びの観察と評価」『岡

山県立大学教育研究紀要』４（１），2019
冨田晃，久保琴枝「自然との触れ合いと表現の芽生え：幼小接続期における植物仮装」『弘前大学教育学部紀要クロスロード』24，2020
冨田晃，松山祐子，野崎克行「藁であそぼう：自然素材をつかった幼児教育と表現の芽生え」『弘前大学教育学部紀要クロスロード』25, 2021a
冨田晃，松山祐子，長瀬公秀，野崎克行「ワラボーであそぼう：自然素材をつかった幼児教育と表現活動」『弘前大学教育学部紀要クロスロード』25，2021b
文部科学省『幼児理解に基づいた評価』2019

（2021．７.29受理）